

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 6年 7月 2日

氏名 緒方亜文

所属 教職開発 コース

指導教員名 藤江康彦 教授

1. 研究課題 コミュニケーションとしての発達支援
2. 報告する学術活動の実施期間 令和 6年 6月 26日 ~ 令和 6年 6月 28日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<p>韓国のソウルの Sogang University で開催された、IEMCA 2024 に出席し、6月27日に口頭発表を行った。発表題は、「The Instruction of Stopping the Sewing Machine: Interactional Analysis of Supporting a Child with ID/ASD (ミシンの操作の停止位置はどのように教示されるか：ID/ASD 児への支援場面の相互行為分析)」であった。</p> <p>本発表では、知的障害を伴う ASD 児がミシンを操作する際に、教師が教示を行う場面に注目した。発話・視線・身体動作などに着目して、相互行為分析を行った。特に、一度行った教示により ID/ASD 児がミシンの操作に失敗し、教師が教示をやり直す場面に焦点を当てた。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

【国際研修の趣旨に照らした成果】

国際的に 1990 年代から増加し始めた、ASD 児・者の相互行為研究には一定の蓄積があり、支援についての経験的な研究も行われている。本発表を行った IIEEMCA は、会話分析を手法として採用する研究者が集う、大規模な国際会議である。ここで研究の知見を発表し、分析のための有益なコメントを得ることができた。

また国内に目を向けてみると、ASD 児・者のコミュニケーションの支援についての事例研究の多くは、ASD 児・者の側の学習や発達に焦点を当てているように思われる。コミュニケーション障害を、相互行為的な構築物として捉える会話分析の考え方は、我が国の発達支援の研究と実践の発展のために有効であると考えられる。本発表は、その第一歩となるものである。

【自身の研究課題につながる成果】

私の研究は全体として、知的障害を伴う ASD 児のコミュニケーション障害をテーマとしている。特に、具体的な相互行為において会話相手が、コミュニケーション障害の現れにどのような肯定的・否定的な役割を果たしているのかを明らかにしている。

本発表は、当初 ASD 児に伝わらなかった教示がやり直され、伝わるようになる過程を分析している。いわば相互行為上、否定的であった役割が、肯定的に変化する契機を捉えており、私の研究の中核を占める分析である。